

Special Essay

私と演劇

内科学講座（呼吸器・神経・膠原病内科部門） 井田 弘明

今年、私の母校の久留米大学附設高校演劇部が全国制覇を果たしました。全国 2000 校の頂点に立ったわけです。私は、附設高校 27 回生で当時の演劇部の部長でした。

私たちの時代の母校は、高校演劇連盟へ加入していませんでしたが、私が高校 3 年生の時に、翌年から正式参加する予定ということで高校演劇祭に参加させてもらいました。大会開始前の前座として公演をするように依頼され、久留米市民会館で行いました。後から分かったことですが、女優の黒木瞳さんも他校で出演されていたそうです。計算すると 36 年前の前座からスタートしたわけで、今回の優勝は感慨深いものがあります。8 月 31 日に東京の国立劇場で開催された受賞公演（受賞作「女子高生」）は、同級生と一緒に観に行きました。

私は高校 1 年生の春、特別に演劇に興味があったわけではありませんでしたが、演劇部の先輩方から、「存続危機だから入部してくれ」と嘆願され入部しました。私たちの学年も当初は部員が少なく、中入生と高入生からイケメンが 1 名ずつ、また同級生の人気者 2 名が入部した結果、盛り上がるようになりました。さらに、オーディオや照明に詳しい者、フロア・デュレクターに興味を持っていた者も取り入れ、最高のメンバーとなりました。当時は、舞台道具のストックがなく、大道具作りのため材木屋へ出向き、材木を購入してリヤカーで運びました。背景の枠を作るため木をのこぎりで切り、釘でうちつけて作成しました。校舎の前の空いた敷地で新聞紙を枠に貼り付け、背景を描きました。炎天下で辛かった思い出があります。演劇は脚本が命です。当時は男子校のため、女性の役がない台本は戦争ものか刑務所ものでしたが、できるだけ有名な作家の新劇を選びました。公演前は放課後に練習、間に合わない時には、寮の洗濯室で台詞を覚えました。公演開始直前、緞帳の裏で控えている時、観客の声のドーンという低音で聞こえ、とても恐ろしく、今でもその時の緊張感を覚えています。

思い出深い公演の作品としては、私たちが高校 2 年生の時の学園祭(男く祭)で演じたつかこうへい作「戦争で死ねなかったお父さんたちのために」です。石橋文化センターの大ホールでした。クライマックスの「天皇陛下万歳、天皇陛下バンザ」で全員が

手を挙げたまま静止して終了、照明の効果も幻想的にできていました。今でもその瞬間の情景を覚えています。高校3年生の時の学園祭では、清水邦夫作「夜よおれを叫びと逆毛で充す青春の夜よ」を演じました。私は女役をしました。女役は当時男子校でもあり、喜劇になってしまうので、能面に着物の出で立ちで幻想的に仕上げました。

今考えても、私の高校生活のほとんどの思い出が演劇部での活動です。若いうちにひとつのことに打ち込むことは重要だと思いますし、後から記憶していることは、そのようなことだけです。

